

なると人物埴輪の製作が始まる。なお、これら各種の埴輪は六世紀末の前方後円墳の衰退とともに消滅する。

#### 古墳の石材と産地

古墳を築造する場合、埴輪以外にも石室の構築や墳丘外表面の保護・装飾のために多量の石材が必要となる。一般的にこれらの石材は付近の丘陵や河川から調達すること

が多いが、古墳によつては、特定の産地の石材を使用することがある。

葺石かきいしでは、神戸市五色塚古墳ゴシキづかの場合黒色の礫が使用されているが、これは英雲閃緑岩で淡路島の東海岸で産するものである。また、奈良県天理市榊山古墳の白色の小円礫も、淡路島南東部の吹上浜で産する。

竪穴式石室の側壁には扁平へんぺいな割石が使われるが、摂津では石英粗面岩、河内・大和では安山岩、山城では粘板岩と、それぞれ地元の石材が使われる。しかし、紀伊や阿波産の緑色片岩や紅簾片岩こうれんなどの美しい結晶片岩は、広く畿内全域で使用されている。

石棺はしばしば軟らかい凝灰岩で製作される。播磨の竜山石は長持形石棺・剣抜きくわいぬき式石棺などに加工され、約一〇〇メートル離れた京都府城陽市久津川車塚古墳などでも使用されている。また、北部九州の古墳からは石人・石馬と呼ばれる石製品が発見されるが、これらは阿蘇溶結凝灰岩を素材としている。

#### 四 生活

##### 庶民の暮らし

近年、日本の「ポンペイ」ともいうべき集落が、群馬県子持村黒井峰遺跡くろいのみねで発見された。この遺跡は、六世紀中ごろに噴火した榛名山はるなの軽石によつて厚さ二メートルにわたって覆い尽

くされた集落の跡である。

黒井峰村では、竪穴住居や平地建物・高床建物などで一世帯が構成され、合計一〇世帯程度が生活していたことが判明した。このうち「家畜飼いの家」と呼ばれる世帯は、竪穴住居一軒のほか、住居四軒・作業小屋一軒・家畜小屋五軒などの平地建物一〇軒と、高床建物四棟からなり、周りには垣がめぐらされていた。竪穴住居は八<sup>ト</sup>四<sup>ト</sup>方で、床面の深さは一・五<sup>ト</sup>を計る。作り付けのカマドは大型で、煙突を含めると高さ二<sup>ト</sup>を超す。平地住居のうち一軒にはカマド付近の土間と、壁に沿った幅一<sup>ト</sup>の寝のための空間(土座)があり、頭上には棚も付けられていた。家畜小屋は切妻屋根で、内部は三<sup>ト</sup>四<sup>ト</sup>の小部屋に区切られ、床には板や丸木が敷き詰められている。この建物の脇には、家畜の糞尿をためたと考えられるくぼ地や溝があり、内部の土壌中の脂肪酸分析や足跡から、牛や馬が飼われていたことが判明している。更に、住居の周辺には一<sup>ト</sup>三<sup>ト</sup>四<sup>ト</sup>の小さな長方形の区画数十枚からなる畑が耕され、稲が主に栽培されていた。ほかにも住居内から、小豆・ハトムギ・麻・ヒョウタンなどが発見されている。

このように一般集落を構成する建物には、竪穴住居と平地建物・高床建物とがある。竪穴住居は前期ではごく一部で床面が円形または多角形のものがあるが、大部分の地域では正方形ないし長方形である。主柱は四本または二本で、貯蔵穴やベッド状遺構を持つものがある。中期から後期になると、全国的に床面は方形で、主柱が四本になり、カマドを持つ住居が急速に増加する。掘立柱の平地建物は、五世紀代のものが大阪府八尾南遺跡などで見つかっているが、普及するのは六世紀以降である。高床建物も五世紀以降のものが確認されており、住居と倉庫とがあるが、通常二<sup>ト</sup>二<sup>ト</sup>間で正方形に近い建物は倉庫と考えられている。

### 豪族の居館

古墳時代には各地の首長層は、一般集落とは別に防御的性格を持つ濠で囲まれた居館で生活している。前期初頭の居館は、大分県日田市小迫辻原遺跡つしぼで三基発見されているが、うち東側の1号居館は外径四八メートルの方形に濠がめぐらされている。

中期から後期にかけての居館としては、群馬県群馬町三ツ寺遺跡がよく知られている。この居館は内部が約八六メートルの方形をなし、その周囲を幅三〇〜四〇メートル、深さ二・五メートルの濠がめぐるもので、全体では一六〇メートル四方の規模を持つ。館の南北二か所の隅には方形突出部があり、外部への出入り口となっている。濠の内法面うちほうには葺石状の石垣が積まれ、その上面には柵列が設けられている。また、館内は柵列によって二分され、南西側には主殿と思われる一四×一三・七メートルの掘立柱建物があり、その前面に広場がある。北東側の区画には竪穴住居八軒と高床倉庫七棟が軒を連ねている。ほかにも館の内部には、四か所の張り出し部に望楼の存在が推定され、導水施設や井戸、更に水に関する祭祀を行う石敷遺構なども発見されている。

三ツ寺遺跡の居館が建設された五世紀後半は、全国的に豪族の居館が増加する時期である。その背景には、須恵器や鉄の生産などの新しい技術が地方に導入されたことと、土木技術の向上によって農地の開発が進んだことなどがある。これによって、地方に豪族が急成長したものと考えられる。

### 古墳時代の食生活

古墳に立てられた埴輪のなかに動物埴輪や動物を伴う人物の埴輪がある。動物埴輪では鹿・猪いのしし・猿・馬・牛・犬・水鳥などがあり、人物埴輪には鷹匠たかしやうや鵜匠うしやう、猪の子を腰につけた人物などがある。動物埴輪のうち、鹿・猪・猿などは狩猟の対象であり、馬は主として戦闘や移動の手段であるが、重要な儀式の際には食用ともされたと考えられている。更に、牛は農耕用に飼育され

ていたが、その乳から「酪」や「蘇」と呼ばれる乳製品が加工されていたと推定されている。

米の調理法は、弥生時代には甕で炊いていたが、古墳時代中期になると住居内に作られたカマドの上に甕（じし）を載せて、蒸すようになった。また、古墳に供献された土器の中には、ハマグリやウニ、魚類などの海産物が盛られている場合がある。更に、藤原京の木簡にはワカメを指す「海藻」の文字がしばしばみられ、海産物も重要な食料となっていた。調味料では、中期に塩の生産が盛んになり、この塩と大豆を材料として味噌や醤油も造られたと考えられている。

須恵器は、食器としての普及は後期以降である。また、須恵器は水をあまりもらさないため、大甕は水や酒の貯蔵に使われ、稲粃などの穀類の保管にも使用された。

以上のように、古墳時代中期以降は、豊富な食材と調理法の革新により、人々はそれ以前に比べ斬新な食生活を送ることが可能になった。

### 衣服と装身具

古墳時代の服飾を知る手がかりには、人物埴輪や石人、装飾古墳の人物画などがあるが、いずれも中期後半以降の資料である。また、人物埴輪などで表現された服飾（第9図）は、古墳の被葬者の周辺に生活する人々のものが多く、地域社会で上位に位置する人々に偏る傾向がある。

盛装の衣服は、男性では上衣が腰下ぐらいのたけで左衽（さきむ）の前合わせとなっており、下衣の「裋（かみ）」はゆつたりとしたズボン状のものである。女性は、上衣は男性とほぼ同じものであるが腰に帯を締めない場合もある。下衣の「裳（も）」は、足元まで長く広がる巻きスカート状の衣服である。一方庶民の衣服は、農民の埴輪からみれば、方形の布を綴じ合わせただけで装飾性のない貫頭衣風のもので、腰にひもを結んでいる。髪

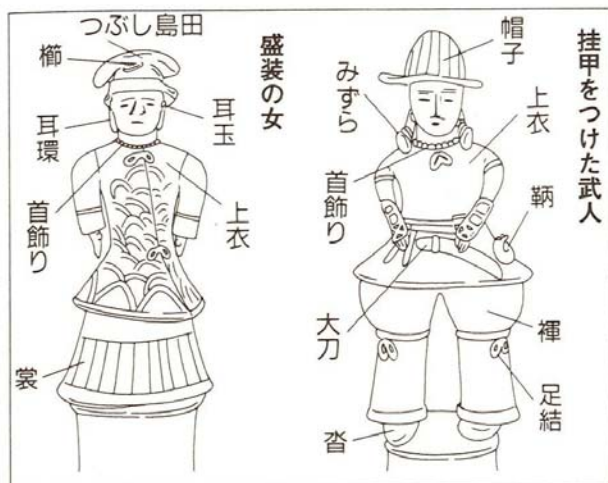


は男女とも長髪で、盛装の男性の場合、両耳付近で棒状に束ねた「美豆良」が一般的である。女性の埴輪では「つぶし島田」の髪型や、櫛をさしたものがある。

装身具では、古墳の副葬品のなかに玉類や金属製品がみられる。耳飾りとしては、垂飾付き金製耳飾りや銅・金・銀張りの耳環がある。首飾りでは勾玉・管玉・小玉などを連ねたものが多く、腕飾りには金属製品と玉類からなるものがある。これら以外にも、頭にかぶるものでは、金製の冠や金銅製の冠帽があり、布製の帽子も埴輪にみられる。帯や履にも金銅製のものがあるが、布または皮状のものを表現する埴輪もある。

## 第二節 豊津の古墳

古墳時代の墓として、豊津町内には前方後円墳・方墳・円墳などがあり、ほかに横穴墓も分布する。前方後円墳は惣社古墳、方墳は甲塚方墳が各一基ずつ確認されている。円墳は、節丸地区の被川両側の丘陵部に



第9図 埴輪の服飾